２０１６年度

修 士 学 位 請 求 論 文 要 旨

中国語における日本のマンガ・アニメ・ゲームのファン・コミュニティから発生した新語の研究

― 新しい日本語借用形式とその出現原因を中心に ―

国際日本学研究科　国際日本学専攻

ポップカルチャー研究領域　学籍番号 4911141001

張　晗

中国語における日本のマンガ・アニメ・ゲームの ファン・コミュニティから発生した新語の研究 ―新しい日本語借用形式とその出現原因を中心に―

4911141001 張 晗　　（指導教員）　森川　嘉一郎

本論文は中国語におけるACG用語に関する研究である。「ACG」は、Anime、Comics 、Gamesの頭文字であり、中華圏において、特に日本からのアニメ、マンガ、ゲームを総称する語として用いられている。2016年現在、中国でACG用語を学術的に枠付けるよう定義や基準は存在しない。本研究は、「ACG用語」を「中華圏における日本のマンガ、アニメ、ゲームの受容層の間で、マンガ、アニメ、ゲームを話題にする文脈の中から用いられるようになった新語」とおおまかに枠付けた上で、いくつかの基準に沿って語を選定し、その傾向を分析するものである。

もともとACG用語は、中華圏におけるACGの受容層のコミュニティの中で限定的に使われる一群のスラングに過ぎなかったものの、その強い表現力によって、2000年以降、使用される範囲が拡大した。そのような拡大を象徴する事例が、「给力」という語である。2010年5月中国の「cucn201」とグループ名を名乗る4人の「吹き替え組」の大学生が、趣味で日本のアニメ『ギャグマンガ日和』を中国語に吹き替えた。優酷網にアップロードし、校内網においてシェアした。その吹き替え作品の中で、日本語のセリフ「これは天竺か、すごい地味ですね法師」を「这就是天竺吗，不给力啊老湿」と中国語に翻訳し、吹き替えた。cucn201が吹き替えた『ギャグマンガ日和』の動画のヒットにしたがって、「给力」はインターネット上の流行語となった。その後、南アフリカワールドカップの期間、サッカーの試合の放送や評論でマスメディアでもよく使われるようになった。更に、2010年11月10日、人民日報社が発行する中国共産党中央委員会の機関紙である『人民日報』において、「江苏给力“文化强省”」というトップニュースの見出しにまで用いられるようになった。中国で最も権威があるとされる辞書は『现代汉语词典』（以下、現代漢語詞典）だが、2012年には、中国社会科学院語言研究所詞典編集室によって修訂された『現代漢語詞典（第6版）』に、「给力」が収録された。「给力」が『人民日報』に使われたことは、中国共産党中央による、インターネット上の輿論に対する理解と重視の体現である。ACG 用語が『現代漢語詞典（第6版）』に収録されたことは、ACG用語が、最も権威ある中国語の辞書の編纂者によって、現代中国語の新語として受け入れられたことを意味する。このような政治的な媒体による活用や、中国語学者による認知と併行して、ACG 用語やその派生語は、中国のマスコミで頻繁使われるようになった。

中国語における日本語からの大量借用現象が最初に出現したのは、清時代の末期である。その後、1972年に「日本政府と中華人民共和国政府の連語声明」が発表され、1978年には

「日本国と中華人民共和国との間の平和友好条約」が結ばれた。加えて中国の文化大革命が終わり、改革開放政策が始まったという中国の国内政治環境の変化があり、この時期から借用された語の中には、以前の「文化」や「道具」などの「漢字」で借用された語には見られなかった、「榻榻米（たたみ）」や「卡哇伊（可愛い）」などの音訳された語も出現し始めた。しかし、2000年代から出現したACG用語には、そのような、それ以前からの日本語借用と様相を異にする特徴が見受けられる。例えば「现（現）充」と「工口」（「工業」の「工」と「口腔」の「口」）で、前者は日本語の「リア充」のカタカナ部分の意訳と漢字部分の直接借用の結合体で、後者は「エロ」のカタカナ表記の借用である。このような、これまで研究されてこなかった新しい日本語借用語の借用方法を明らかにすることは、ポップカルチャー分野とともに、現代中国語に関する学術研究にも資すると考えられる。また、清時代の末期でも、1970年代以後の時期でも、ACG用語以外の、これまでの日本語借用語は、関連する日本の技術や文化などの輸入と併行して出現しており、「輸入」と日本語借用語の「出現」との関係が、明快だった。なぜACG用語は、初の本格的なACGの輸入となった『鉄腕アトム』の中国における本放送当時は出現せず、そこから27年を経た2007年になって出現するようになったのか。ACG の輸入とともに、他の因子が複合的に関係していたのか。その追究もまた、ポップカルチャー分野とともに、現代中国語に関する学術研究にも資すると考えられる。

本論文の構成は以下の通りである。第Ⅰ章は研究背景である。「ACG」と「ACG 用語」の定義を概況し、本研究の目的と意義を述べる。

第Ⅱ章は先行研究である。1950年代から、言語、ならびに文化交流分野の幾人もの中国の研究者たちが、中国語における日本語借用語についての研究を進めてきた。彼らの研究によって、政治環境や流通ルートからの影響により、日本語借用語の借用形式が、単純な「漢字」借用に加え、「発音」借用まで拡張されてきたことが明らかにされてきた。しかしながら、2000年以降現れた「ACG用語」の借用形式について、まだ研究の俎上にのせられていない。そして2004年以降、中国政府は日本のACGコンテンツに対する態度が逆転させている。このことにより、日本のACGコンテンツの主たる流通ルートはインターネットに移った。そして、アマチュアの翻訳者たちが組織を作って、自力で日本のACGコンテンツを翻訳し始めたのである。ACG用語が出現しはじめたのは、この変化とほぼ同時期である。両者の間にどのような関係が存在するのか、この点についてはまだ研究がなされていない。政治環境や流通ルートの大きな変化が、ACG 用語の中に、「漢字」借用でもなく、「発音」借用でもない、新たな借用形式をもたらした可能性を含めて、検証したい。

第Ⅲ章は研究方法である。第Ⅱ章でまとめた、ACG 用語をめぐる既存研究の課題に基づき、本論文は以下の2つの仮説を立て、これを検証する。仮説1は、ACG 用語には、それまでの日本語借用語に見受けられた「漢字」借用や「発音」借用とは異なる、新たな形式で借用された語が存在する。仮設2は、ACG用語が2000年以降になって数多く出現するよ

うになった主たる理由の１つは、中国政府が日本からのACGコンテンツの公式な輸入を大幅に制限した結果、中華圏のACG受容層のコミュニティの中で、アマチュアのファンを中心に翻訳が行われるようになったことにある。仮説１を検証するために、使用する方法は資料調査である。まずは一定の客観性を持って、辞書から、ACG関連情報誌から、ACG用語の事例を収集した上で、各々の借用形式を判定する。仮説２を検証するために、使用する方法はインタビューである。アマチュア翻訳者による日本のACGコンテンツの翻訳とACG用語の出現はほぼ同時である。両者の関係を明確にするために、ACGコンテンツの中国語翻訳（吹き替え）に関わるアマチュア翻訳者を対象として、インタビューを行う。また、ACG用語の流通と運用について、ACG用語の発展にも深い関係があると考えられるため、研究補足として、中国のオタク向け雑誌の編集者にもインタビューを行う。

第Ⅳ章は研究経過である。オタク向け雑誌から抽出した「ACG用語」には、「漢字」借用、「発音」借用以外の、新しい方法で借用された語が存在する。また、「アマチュア翻訳者の翻訳動機」、「アマチュア翻訳者の組織と翻訳作業」、「インターネットの普及とACG用語の拡大」の３点を巡って、インタビューで得た証言を整える。

第Ⅴ章は研究結果である。本論文では、第Ⅲ章の「資料調査」の方法を使用して、以下の4つのACG用語の中の新しい日本語借用形式を発見しました。(1) 意訳＋漢字借用、(2) 音訳＋漢字借用、(3) カタカタ表記借用、(4) カタカタ表記借用＋意訳である。また、インタビューを通じ、得られた結果は、以下の３点から、仮説２を支持している。(1) アマチュア翻訳者たちは、趣味で、自発的に翻訳作業を行っている。アマチュア翻訳者たちの翻訳作業には、金銭的な動機が存在しない。(2) アマチュア翻訳者と翻訳組織（字幕組、吹き替え組など）との間には、正式な契約が存在しない。翻訳したものの質、用語の規範は翻訳組織の自己管理の範疇である。原則として、校正者個人が翻訳したものの質や用語の規範を管理する。一方、翻訳作業において、格好をつけるために、あえて新語を作成したり、非規範的な語を使用したりする傾向もある。(3) 2000年以後、中国におけるインターネットの普及に応じて、ACGのファンはインターネット上で、公式の放送や販売が制限された日本のACGコンテンツと接触することができるようになった。そしてこのことは、中華圏におけるACGのファンのコミュニティや、ACG関係のメディアの出現を促す作用もあった。さらにそれは、ACG用語の使用範囲を拡大させる、必要条件にもなった。以上から、２つの仮説が検証された。